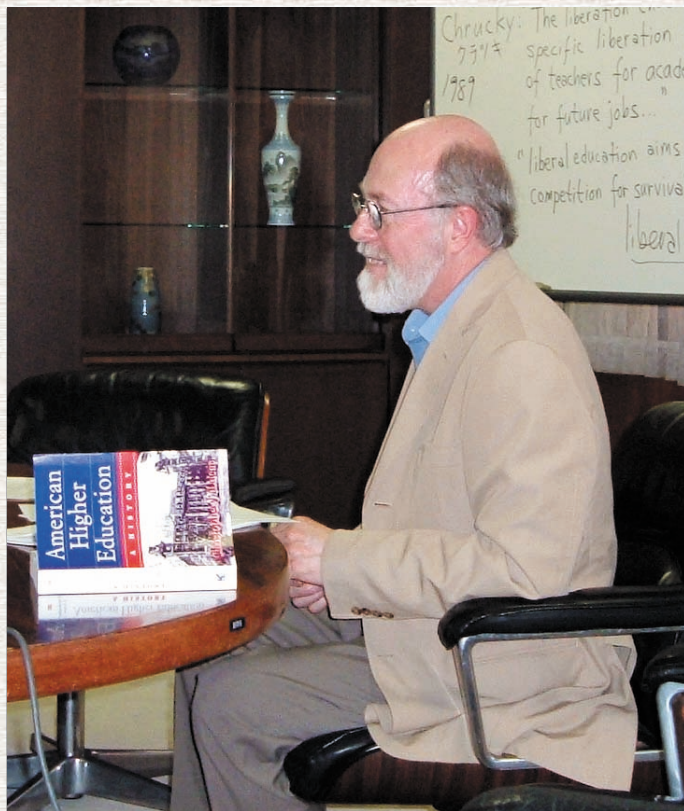


# 大学教育開発センター通信

SUMMER  
Vol.10  
2005



2005年度前期FDサロンの話題提供者の先生方

第1回 ライト トーマス経営学部教授 (右)  
第2回 ウェルホイザー ナディア経済学部講師 (左下)  
第3回 ロザーティ サイモン経済学部助教授 (左上)

※FDサロンの紹介はp14をご覧ください。

## CONTENTS

|               |                                                                                                                                    |    |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 特集1           | 学生像に迫る ～現場からのレポート～                                                                                                                 | 2  |
|               | 大学教育開発センター長 近藤久雄<br>「いまどき」学生を考える 学生相談室カウンセラー 吉村美江子<br>課外活動について 学生部長 新田光子 (社会学部教授)<br>学生像に迫る ～キャリア開発の視点から<br>キャリア開発部長 宇土顕彦 (理工学部教授) |    |
| 特集2           | 4テーマでスタート! 指定プロジェクト 研究代表者からの報告                                                                                                     | 6  |
|               | ～新たに、テーマ「高大連携」が加わりました～<br>「高大連携」四ツ谷晶二 (理工学部教授)、「導入教育」中根 真 (短期大学部助教授)<br>「教育評価」中沖 隆彦 (理工学部教授)、「成績評価」小島 勝 (文学部教授)                    |    |
| FD活動紹介        |                                                                                                                                    | 8  |
|               | 私的FD試論 亀山佳明 (社会学部部長)<br>経済学部のFDへの取り組みについて 西本秀樹 (経済学部教授)                                                                            |    |
| 研修参加記         |                                                                                                                                    | 10 |
|               | 北川逸子 (経営学部教授)、西本秀樹 (経済学部教授)、野間圭介 (経営学部教授)                                                                                          |    |
| 雑感 = ZAKKAN = |                                                                                                                                    | 11 |
|               | 大学教育開発センターの使い方 大学教育開発センター長 近藤久雄                                                                                                    |    |
| お知らせ          | 前期「公開授業」と「講評会」を終えて                                                                                                                 | 12 |
|               | 前期「学生による授業評価調査(授業アンケート)」を終えて                                                                                                       | 13 |
|               | FDサロン 後期もどうぞご期待                                                                                                                    | 14 |
|               | パソコン講習会・新着図書・先生の知恵袋                                                                                                                | 15 |
|               | 「第1回龍谷大学FDフォーラム」開催決定!                                                                                                              | 16 |
|               | 2006年度「自己応募プロジェクト」募集                                                                                                               |    |
|               | 編集後記                                                                                                                               |    |



## 大学教育開発センター通信 第10号

発行日: 2005年7月29日

編集・発行: 龍谷大学 大学教育開発センター  
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67  
TEL (075) 645-2163 FAX (075) 645-2190  
<http://www.ryukoku.ac.jp/fd>

発行責任者: 近藤久雄



# 学生像に迫る ～現場からのレポート～

大学教育開発センター長 近藤 久雄

大学教育のあり方を考える場合、議論の出発点として、明確な学生像を共有しておくことが重要であるように思われます。そこで今回は、現代の若者達は何に悩み、どのような問題を抱えているのかを考えてみました。

不登校や学級崩壊等の初等中等教育が抱える問題、および引きこもりやニート、あるいはフリーターといった青年期の問題は、冷静な目で見てみると案外共通の根をもっているのかもしれませんが、そして、こうしたことは問題を抱えた特別な若者が引き起こしているのではなく、むしろ全ての現代に生きる若者達の中に潜む問題が、一部のむしろ繊細で敏感な若者に象徴的に現れているようにも思われます。

私たちは、こうした根っこの部分を理解し、常に念頭において、大学教育とりわけ龍谷大学の今後の教育を考えておく必要があるでしょう。そうでないと、たとえ改革をやったところで、その改革は上滑りの表面的なものとなり、悪くするとかえって教育を崩壊させることになりかねません。

今回は、龍谷大学のそれぞれのセクションで責任ある立場で学生達と接していただいている先生方に寄稿をお願いしました。いただいた原稿を拝見してみると、期せずして同じ問題を感じておられるように思えてなりません。つまり、高度な知識基盤型社会の出現やテクノロジー（とりわけIT等）の発達にともなって、じつくりと自己を見つめ育てていく場や機会を奪われた若者たち、競争を煽るような周りの空気の中で常に自分以外の他者の姿を追っかけ、他者になることを強いられた若者たちの姿です。当然ながら、敏感な若者たちは、そうした社会やテクノロジーに取り込まれることを拒否し、誰にも傷つけられることの無い自分だけの安心できる世界の中に引きこもって生きることを志向することになるでしょう。

就職に際しては、いわゆる「コミュニケーション能力」の未成熟ということが問題となっているようです。これとでも、ことばの持つ認知的な面を考えてみれば、自己の確立できていないものに自分を説明し自分の世界観を説明することばを使うことを求めても無理な話しであることはすぐに分かります。また、ことばが事象を伝達するだけではなく、むしろそのことばを使う人の世界観を決め、その人の人格まで支配する力を持つものであることを考えれば、「コミュニケーション能力」を育てるためには、学生達の人としての成長を促すことを考えねばならないことも明らかでしょう。

龍谷大学のこれからの教育を考える場合に、学生達が人間的に成長するための自由な Extracurricular の営みを保障するキャンパス空間やキャンパスカルチャーを準備することが重要になってくるものと思われます。

## 「いまどき」「学生」を考える

学生相談室カウンセラー 吉村 美江子

学生相談室へ来談する学生数は、龍大生全体での数字として見るなら僅少でしょう。また、個々人の抱えた悩みの解決し難さは、その個別性、独自性の故でもあります。しかし、日々の面接で語られる来談者自身とその友人関係等を通して、学生全体に広く共通する心性や傾向が浮かび上がって見えてきます。

めざましい科学技術の進歩を遂げ続ける現代が、速さ、正確さ、効率性に価値を置くせいでしょうか。アイデンティティの確立という青年期本来の課題と相俟って、多くの学生が「遅れてはならない」「失敗してはいけない」という焦りや不安を過剰に刺激され、試行錯誤しながらじっくり取り組むことのできにくい状況に陥っていることを痛感します。実体験を積み重ねていく中で納得し自信をつけていくプロセスは、大学入学までにも十分には経験できていないのかもしれませんが。「正しい」「間違っている」、「よい」「悪い」のデジタル的思考が強いですし、「中間」「曖昧」「迷い」の状態は、自分にも他者にもなかなか認めがたいことのように見受けられます。

利便性を追求する社会は、生の対人関係の場を省く方

向へと進み続けてきました。生活空間は広がりましたが、関係性の中で他者を知り自分を知る機会は失われがちです。多くのメル友がいて頻繁にメールのやりとりはしても、声の調子も表情・仕草も分からない文字だけのやりとりは、書き言葉以外の情報を伝えない隠れ身性を持っています。傷つけ合うことを恐れて互いがそこに留まるなら、作り出したイメージだけが膨らんで現実の姿は見えないままです。大半の学生たちは、友人と一緒に居る場でもいい子を頑張り、暗いとか重いとか思われそうな話や、周囲のテンションを下げてしまいそうな話はお互いに避けて通っています。一度こじれるともう関係を持てなくなると思い込み、実体験のないままに頭の中だけの理想と、その理想が崩壊する恐れを抱えています。他者を傷つけることへの恐れが、実は自己愛が傷つく恐れだとの自覚が希薄なものになるところです。

自分の内側から湧いてくる「感情」や心身が受け取る「感覚」を、他の人と自分では何か違うのではないか、おかしいのではないかと頭で考えて不安になっている学生も多いのです。比較すればする程に各人各様で微妙に違っていてもむしろ当然な「感情」や「感覚」なのに、違いの原因を究明して客観的な結論を出そうとでもするかのような、そしてそこに不安の解決があるかのような錯覚が生じています。そのような合理的、科学主義的パラダイムを持ち込んで、それで駄目なら「感情」そのものを無視してしまおうともします。無視している自分にす



ら全く気づけないほど過剰適応し、一見何の問題もない学生として周囲に映っているとなると更に深刻な事態といえるでしょう。

どうあるべきかを理屈として知的理解はしていても、実際には心や身体がそうできない、そうならない、どこか納得できない…人は時に否が応でも「中間」「曖昧」「迷い」の状態に身を置かざるをえないことがあります。精巧な機械ではない生身の人間なら当然の、いわば人間らしさです。学生を取り巻く大人たちも、彼らの「感情」や「感覚」を受けとめることを十分にせずして接しがちなかもしれません。心の問題を意志や性格の問題だとして片付けようとしたり、因果関係で一般化してしか見ようとしなかったりする保護者や教職員に出会うことも

無いわけではなく、学生自身の問題ではあるものの、その置かれている環境の難しさを感じることもあります。本人にとって重要であることなら迷い悩むことが必要であり、「感情」や「感覚」をじっくり味わってこそ生じる納得や辿り着ける選択肢が見えてくるはずなのです。それを待たなくなっている社会全体の傾向も憂えるべきことといえるのではないのでしょうか。

いろいろ述べてはみましたが、「いまどきの学生は…」と語るだけでは安易で無責任なことだと考えます。まさにその「いまどき」に関与して生き「学生」に接している私たち教職員自身が学生理解を深め、それに基づく実践を継続していくことだと思われます。

## 課外活動について

学生部長

新田 光子 (社会学部教授)

わたくしは、以前から「これが龍大生だ」というような単純なとらえ方はしなかったのですが、最近学生部の一員となり、授業以外のところで龍大生と接する機会が多くなったせいか、そうした気持ちが一層強くなっています。クラブ・サークル活動関係者のなかには、立ち居振る舞いのしっかりした学生が少なくないためでしょうか。「今の大学で学生が社会性や自主性を養えるのは、部活だけだ」という極端な意見には賛同しませんが、大学生活における課外活動について、もっと議論されているのではないかと考えています。

課外活動の重要性を強調する大学関係者は多く、そのための財政的支出もかなりだと思いますが、そのわりには課外活動への評価は一般的には高くないような気がします。大学のレジャーランド化が声高に言われるようになった、大学も宣伝や入学者確保のために確たる教育理念もなしにスポーツ特別入試を導入した、バブル期の企業が営業要員に体育会系学生を大量採用した、就職試験の面接ではだれもがクラブ・サークルの役員としてリーダーシップをふるった話をする、学力低下が問題とされた、こういった現象が重なって課外活動のマイナスイメージを作ってきたことはまちがいないでしょう。

もともと日本の学校文化は正課教育を重視していますので、いくら課外活動を強調しても、後ろめたさを感じる教員の方が多いのではないのでしょうか。学生の満足度ということが問題にされても、そこでとりあげられるのは、まだ圧倒的に「授業の満足度」です。

わたくしは、少子化や大学全入時代のための対策などという考えではなく、これからの大学はいかにあるべきかという理念にたって、課外活動を大学生活のなかにきちんと位置づけるべきだと思っています。

こうした立場は少数派かもしれないと考えておりましたので、Richard J. Light の “Making the Most of College: Students Speak Their Minds” (2001) を大変興味深く読

みました。ハーバード大学教授の書いたこの本は、アメリカの大学生生活について書かれたものの中でも最も優れた一冊であると言われていいますから、FD関係の先生方はご存知かもしれません。

Light教授は、学生にたいして、勉強だけではなく、アルバイトでもボランティア活動でも、スポーツでもなんでもいいから、勉強以外の活動にも打ち込むようアドバイスをしていると述べ、ハーバード大学の学生を対象にした調査にもとづいて、成績と関係のない勉強以外の活動 (outside-of-class activities) と大学生生活にたいする満足度とが強く相関していることを強調しています。

勉強以外の活動を、アルバイト (paid work)、運動部 (intercollegiate athletes)、課外活動 (extracurricular activities)、ボランティア活動 (volunteer work) に分けて調査結果を示しているところは、日本と変わらないなと思いました。ハーバード大学でも運動部員は学業成績が平均して運動部でない学生より低いという指摘には、苦笑しました。

Light教授は、勉強だけの大学生生活は幸せでもないし、大学生生活の満足度にもつながらない、勉強とそれ以外の活動とのバランスをとることが重要なのだとおっしゃりたいわけですね。まったく同感です。

多くの大学や機関が「学生生活調査」を行っており、アルバイトや課外活動 (クラブ・サークル) についても質問しています。しかし、ほとんどの調査がお座りのような気がしてなりません。大学としてアルバイトや課外活動にどういう姿勢をとるのが、あいまいだからでしょう。そのことは質問文や選択肢、そして解説からよくわかります。

大学淘汰の時代をふまえて、もし「リベラルアーツ・カレッジ」の方向を選ぶならば、授業外活動の持つ意味は、より大きくなるでしょう。現在、課外活動に参加している学生はどの大学でもだいたい5割ですが、もし、より多くの学生に参加させたいと本当に思うなら、通学時間を考慮したカリキュラムや時間割が必要になるのではないのでしょうか。

課外活動は、単に学生の自由時間の使い方の問題ではなく、将来の大学のあり方そのものに関わる重大問題であることを、大学関係者すべてが認識すべきだと思います。





# 学生像に迫る ～キャリア開発の視点から～

キャリア開発部長

宇土 顯彦 (理工学部教授)

「最近の龍谷大学生像を描け」との執筆依頼を頂きましたが、やはり、学生諸君が育ってきた、家庭、地域、学校など社会一般における変化が大きく反映しています。したがって、以下では筆者の周辺で見受けられる例をいくつか挙げますが、世の中の一般的傾向としてお考え下さい。

龍谷大学として、<sup>※</sup>Ryukoku21に書かれているように「自律と思いやりの精神、基礎的知識と専門性のバランスがとれた社会貢献のできる人材」の育成を図り、学生諸君に大きな付加価値をつけて社会に出てもらうことが必要です。このような能力を最近、「人間力」と言います。ただし、「思いやりの精神（共生：ともいき）」は龍谷独自のものと思います。

まず、人間力が最初に問われる、「就職」の最近の一般的状況をまとめます。

## 1 若年者の雇用状況

若年者の雇用について、以下のような数字があります。まず、2002年度における15歳～24歳の失業率が9.9%、大卒で無業者が12万人、一時的職業に就いた者が2.5万人で両者を合わせると大卒55万人の4分の1となります。また、七五三問題といわれますが、中卒者の7割、高卒者の5割、大卒者の3割（最近35%という数字も見ました）が就職後3年以内に離職します。

なお、上記の失業率9.9%は2004年度では9.1%で多少改善の傾向にあります。

若年者の雇用悪化の原因として、一つには「雇用側（おもに企業）の要求・都合」があります。グローバル化のなかで国際競争力を得るために、雇用コストの削減を目的とした雇用形態の多様化が進んでいます。従来からの正社員、パート、アルバイトに、少し前から派遣、契約、臨時などが加わっています。また、ポテンシャルを重視し、採用後じっくり育成するという時間を掛けた人材育成の余裕がなく、コア社員の少数厳選採用が行われています。

一方で「学生側の問題」があります。これも、最近の社会一般に言えることで、限られたデータから見る範囲では、たとえば本学の卒業生の離職率は低いという印象を受けます。以下、この一般的問題点を「最近の学生」としてまとめると、なぜ、採用されないか、なぜ、3年以内に辞めるかということになります。

なお、大卒の有効求人倍率（民間企業の求人総数を就職希望の学生数で割った値）は2000年の0.99を底に最近では1.3倍台が続いていましたが、2006年4月では1.6倍となりました。団塊世代の大量退職に備え、企業の採用意欲が大幅に改善しています。1.5倍を超えると学生の方で企業を選ぶことができると言われます。

※龍谷大学第4次長期計画基本構想（評議会1999年9月30日）

## 2 最近の学生

### (1) 学問に対する興味の低下

小中学生に対するあるアンケート結果を見ると、「勉強が大事と思う」は8～9割ですが、「勉強が好き」は2～4割しかなく、「授業が理解できない」が4～6割に及びます。以前から理工系離れが問題になっていますが、これは、ほとんどの電気機械器具が「開けるな危険」のブラックボックスになっていることをはじめ、教科書で理屈を習ったとしても、それに結びつく過去の経験も検証の手段もないことが理由でしょう。教科書は生徒にとって仮想空間です。人文社会系でも事情は同じようです。

### (2) 文章力の低下

板書を写す速度が大きく低下してきています。文章としてではなく、単語あるいは文字単位でしか認識していないように見えます。少し前まで筆者は、その原因を、センター入試では「国語」「外国語」に「作文」がなく、「地道ではあるが論理的思考力育成の基本となる作文」よりも受験のテクニックを優先させたことの弊害かと思っていました。しかし最近では、携帯電話（特にメール）の影響が大きいのではないかと考えています。メールの文章はメモにすぎないし、学生諸君にはまとまった文章を書く機会が減っているようだからです。コンパを召集するときにも、以前であれば「時候の挨拶から始まって日時や会場の地図を付けた案内状」を書いていたのが、最近では「何日何時、〇〇駅から何分の××店で」という短いメモをメールで流すだけ。店を知らない参加者は、駅に着いたら携帯でナビゲーションを求めるといことです。

### (3) 広がらない交友関係

筆者の担当科目の一部では試験の前に前年の問題を公開します。10年前は2部渡しておいたら、130名に行き渡りました。最近では20部近く配っても、後で「問題余っていませんか？ もらったなかに友達いなくて入手できません」と言って来ます。また、期末試験の成績表で「100点や90点」が何名か続く一方で「60点未満」も続きます。入学時のクラス分けあるいはフレッシューズキャンプで同室のメンバー以外には、交友関係が広がっていないようです。

核家族化と少子化、また、地域行事への参加の機会が減っており、多様性の乏しい人間関係のなかで、そこでも軋轢を避ける形で育ってきたことの延長でしょうか。どうも最近の学生諸君は新しい人と関わることが苦手なようです。

この傾向は、京大霊長類研究所正高教授による「ケータイを持ったサル：中公新書」のメインテーマです。

### (4) 偏差値による自信喪失

偏差値が人間の能力のほとんどすべてと考える諸君が多くいます。かなりの力量を持った学生であっても「龍大生など受け入れてくれない」と有力企業への応募を避ける傾向があります。努力しても偏差値の高い大学の学





生には追いつかないというような思い込みをかなりの学生が持っているようです。

### 3 若者の人間力低下の背景

学力やコミュニケーション能力の低下、就労意欲の低下などについて、内閣府「人間力戦略研究会報告書（平成15年）」では以下の理由を挙げています。以下はその要約です。

#### (1) 夢あるいは目標の喪失

「頑張って勉強して大学を出て、有力企業に就職したら定年まで勤められて退職金がもらえる」どころか、「リストラあり、年金制度の崩壊の可能性大」などで、労働に関する社会的モデルが崩壊している。

#### (2) 経済の成熟化

少子化と豊かな社会の中では、定職に就かなくてもある程度のレベルでの生活が可能であるため、就業意欲が低下している。

#### (3) 時代に対応した人材育成機会の不足

従来に増してリーダーシップが求められるようになっているが、一方で若年者が社会活動や集団活動に従事する機会が減少し、リーダーシップを育成する機会が減少している。

#### (4) 職業能力のミスマッチ

高度で専門的な能力や知識が求められる時代である一方、アルバイトや目的なしの進学が増え、職業スキルを身につけることなく加齢し、同世代の新卒就職者に比べ、職業能力の欠如がより顕著である。

#### (5) 社会全体の規範力低下

「責任感、倫理観のない保護者」、「責任逃れの学校」、「地域社会の教育力の低下」などが指摘されている。また、大企業や規範的役割を担うべき人々による不祥事の頻発が、社会全体の規範力の低下、さらに「罪悪感に乏しい」少年による凶悪犯罪の多発につながっている。

報告書に挙げられた以上の5項目に加え、さらに教育現場の問題とIT化が学生諸君の人間形成に大きな影響を与えていると考えられます。

#### (6) 能力の多様性を認めない初等、中等教育

日本の中高生は諸外国との比較で

- 自分に対する満足度が低い
- 将来に希望が持てない
- 夢がない

という割合が多くなっています。最近はずがに無くなったようですが、運動会の徒競走でゴールの前で止まって皆手をつないでゴールインさせるとか…偏差値以外の能力差を否定するのでしょうか。点数化ということでは課外活動/ボランティア活動までがその対象となるようです。

皆が欲求不満、自信喪失に陥っています。「偏差値が

高い」というだけで××大学医学部に入学したが、入学後に自分を見直したら、夢や目的意識を持っていないことに気づいた。「自分らしさがない」ということに内心劣等感を持つ…決して珍しい悩みではありません。

#### (7) ブラックボックス化とIT化

技術レベルの高度化で、電気機械のハードウェアのみならず、ソフトウェアも高度化・ブラックボックス化しています。定型業務をこなすには既存のハード・ソフトで十分です。また、事務分野でも、単にコンピュータが使える（リテラシーがある）だけではだめで、コンピュータを用いて種々の分析を行う能力が求められます。

エキスパートへの道のりは従来よりも遥かに長いものになっていますが、企業は、それを踏まえて十分な教育体制を築いています。求められるのは、基礎的な論理的思考力と意欲、そしてコミュニケーション能力という意味での即戦力です。大卒が入社してその会社の中核業務をこなせるような会社はすぐに潰れるでしょう。

また、IT化には光と影が存在します。

ゲームは一人でも楽しめます。また、限られた仲間内で頻繁にメールをしていることで、友達が十分居るように錯覚します。2. (3) もこのあたりの結果でしょう。また、インターネットから得られる情報は、逆に集団自殺に見られるように、同じ考えのグループをさらに特化させる場合があります。

携帯に何でも記憶させるので、手帳に文字を書かなくなっています。漢字は仮名漢字変換ということで、覚えなくて済みます。記憶力の低下が考えられます。

### 4 龍谷大学としての対応

以上のことから、学生諸君が

- 入学時に人間の能力の多様性を理解する
- 継続した努力の必要性を理解する
- 読み書き計算という基礎能力を付ける
- いろいろの人との出会いを経験する

ことなどが必要と思いますし、それが実現すれば、「思いやりの精神（共生）」で他大学を大きく飛び越えることも可能でしょう。特に、本学が第1志望でなかった多くの学生が「入ってよかった」と思うような、インパクトのあるメッセージの送信が入学時に必要です。

本年6月9日の全学キャリア開発会議で承認された「キャリア開発支援体系の確立および具体化について」は以上を念頭に置くものです。

草間氏および畑村氏による「東大で教えた社会人学：文藝春秋」には所得税の計算の仕方が書かれています。c)については、このような身近な題材が望まれます。また、新聞を毎日15分読むだけでも世の中で何が起きているのかが分かり、かつ文章力が付くでしょう。ゲームやメールに費やす時間をより有効な目的に振り替えるように強力に指導すべきです。

本稿につきましてはキャリア開発部の皆様方を始め、社会学部の村澤真保呂先生、学生相談室の吉村美江子先生に貴重なご意見を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



## 特集②

## 4テーマでスタート!指定プロジェクト

## ～新たに、テーマ「高大連携」が加わりました～

指定プロジェクトは2004年度より「教育評価」「成績評価」「導入教育」の3つのテーマで実施しており、今年度はこれらに「高大連携」を加えた4つのテーマで進めています。今回はそれぞれの概要や現在の進捗状況、今後の予定等をお伝えいたします。

## テーマ：高大連携

研究代表者：四ツ谷 晶二  
(理工学部教授)

龍谷大学では、この数年、平安高等学校との教育連携協議会のもとに「カリキュラム検討ワーキンググループ」を設置して、英語、数学、国語、社会、理科の各科目ごとに龍谷大学への接続を視野に入れた平安高等学校のカリキュラム開発のお手伝いをしてきました。2003年秋には、このワーキンググループを大学教育開発センター所管の事業とすることを部局長会にて決定いたしました。

今年度はこのワーキンググループを、同時に大学教育開発センターの指定プロジェクト「高大連携プロジェクト」として実施するよう大学教育開発センター会議に提案し認められました。これによって、ワーキンググループの活動は大学教育開発センターのプロジェクト報告会（毎年3月に実施）にて全学への報告が義務づけられ、また場合によっては既に「教育評価プロジェクト」で実施しているように、プロジェクト代表の判断によって全学へ公開して議論をすることもできるようになりました。

言うまでも無いことですが、今や「高大連携」あるいは「高大接続」という概念は、高等学校の教育を終えた若者たちが、大学教育への移行をいかにしてスムーズに行うかという方策の研究として、高等教育研究の中で定着しつつあります。こうした問題についての議論や研究が進めば、教育という観点から見た場合に入試のあり方はいかにあるべきか、あるいは昨今言われている導入教育のあり方はいかにあるべきか、などといった問題にも深いかかわりが出てくるものと思われます。

本プロジェクトでは、当面は龍谷大学の教育との接続を考慮した平安高等学校のカリキュラム開発支援を行います。上に述べた意味での「高大連携」への広がりをも念頭に置いて活動を行う予定です。

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| 【英語】島田 守 (経営学部教授)      | 【社会】橋口 豊 (法学部助教授)  |
| 岡本 雄二 (理工学部教授)         | 中川 修 (文学部教授)       |
| W.S.Bradley (国際文化学部教授) | 岩田 貢 (法学部教授)       |
| 【数学】四ツ谷 晶二 (理工学部教授)    | 【理科】原田 忠夫 (理工学部教授) |
| 松本 和一郎 (理工学部教授)        | 後藤 義昭 (理工学部教授)     |
| 西山 龍吉 (文学部教授)          | 宮浦 富保 (理工学部教授)     |
| 辻上 哲也 (理工学部助教授)        | 堤 一義 (理工学部教授)      |
| 【国語】小寺 慶昭 (文学部教授)      |                    |
| 大取 一馬 (文学部教授)          |                    |

## ■指定プロジェクト「高大連携」研究報告会(予定)

日 時：10月12日(水) 15:00～  
場 所：深草学舎



平安高校で行われたワーキンググループ(理科)の会合の様子。

## テーマ：導入教育

研究代表者：中根 真  
(短期大学部助教授)

本プロジェクトは、これまでの大学教育のプログラムではあまり取り上げてこなかった「社会人としての自立への対応方法」を検討し、かつ実験的実践を通して、具体的な対応策を導出することを目的としております。その目標達成に向け、現在までのところ、外部の教育資源と連携したワークショップを6月に実施いたしました。

このワークショップの実施にあたっては、以前本学のカウンセリング研修課程で講師をお引き受けいただいていた、自然スクール「トエック」の伊勢達郎先生を中心としたグループにご協力をいただきました。先生には事前の打合せの中で、今回のプロジェクトの目標に沿ったワークショップの構築を



「共感」をテーマに熱く語りかけられる伊勢先生。

お願いし、これまでのノウハウを生かした多様なプログラムをご提供いただきました。

ワークショップではアイスブレイキングプログラム終了後、集団の中で自分という「個」の存在を如何に維持するかをヒーリング体験とともに学ぶプログラムからスタートしました。このプログラムは、多くの学生が集団の中で自分自身の立ち位置を確保することが難しくなっていることも、大学生としての自立を阻んでいる、そして場合によっては講義中の私語増加の原因につながっていることを意識した、体験的プログラムでした。その後、集団での信頼関係の築き方やコミュニケーションの取り方を学ぶワークショップが続きました。これは集団の中での自分自身の役割を自分自身がしっかり意識しておくことや、周囲に自分自身の役割を認識しておいてもらうことの重要性を体験的に学ぶプログラムでした。他にも個別カウンセリングや集団カウンセリングの基礎などを体験から学ぶワークショップが行われ、自分の考え、思いの伝え方、伝えることの意味、伝えられたことの捉え方などを多角的に学ぶプログラムが実施されました。

今回のワークショップでは、福祉に直結するような研修プログラムを予想していた学生には驚きの連続のようでしたが、大学での学修を進めていく上で、あるいは学生生活を送っていく際の導入教育としての意義に少しずつ気づくこともできるようになり、多くの学生にとってこれまで気づけていなかったものに気づくきっかけになったように思われます。



公開講演会（6月14日）、講師は堀池喜八郎滋賀医科大学教授。（瀬田学舎）

「教育評価」指定プロジェクトは2004年度にスタートして、本年は2年目を迎えました。新しいメンバーを加えて活発に議論しています。昨年度は「教育評価」の最も重要な位置を占める授業アンケートについて、かなりの時間を割いて検討しました。その結果、質問項目の明確化と質問バンクによる自由度の大きい授業アンケートを大学教育開発センターに提案を行いました。しかし議論の過程で問題になったのが、現在の授業アンケートは各教員の個人的な授業改善に委ねられていて、事後のフォローがなく支援体制などのシステムが欠如していることです。より良い授業を目指すためには、授業アンケートの分析、適切な助言、授業改善に努力した教員の評価など支援体制の確立が必要であると考えられます。この

ようなことから本年度は授業アンケートの活用方法を中心に、どのような支援体制が考えられるかを、実行可能な現実的な視点から検討していきます。しかし授業アンケートによる評価は教育評価の中の1つでしかありませんので、その他の教育評価方法についても同時に検討していきたいと考えています。

プロジェクトの活動は昨年度と同様、月例会の開催、他大学講師による講演会、他大学訪問による聞き取り、などを行っています。夏休みまでは教育評価の現状について国内のみならず国外の状況も含めて、プロジェクトメンバーによる調査を行い、理解を深めていく予定です。夏休み後に、調査結果をふまえて本学に適合した教育評価システムについて議論していく予定です。

プロジェクト研究会は公開で行っていますので、是非参加いただいてご意見をお聞かせください。

#### 【2005年度「教育評価」プロジェクトの活動】

- |       |                                                  |
|-------|--------------------------------------------------|
| 4月28日 | キックオフミーティング                                      |
| 6月14日 | 公開講演会<br>「滋賀医科大学における教員の評価」<br>滋賀医科大学教授 堀池喜八郎     |
| 6月23日 | 公開研究会<br>「海外の教育評価システムについて」<br>国際文化学部助教授 ポーリン・ケント |
| 7月28日 | 公開研究会<br>話題提供：経営学部教授 加藤正浩                        |

昨年度は、全学の2004年度のシラバスの「成績評価」の内容を集計・分析させていただきましたが、今年度はこの継続として、昨年度に本学の授業をご担当の先生方にアンケートをお願いしました。全学の4,330科目の中から4分の1にあたる1,082科目を無作為に抽出し、先生方に1科目についてご回答いただくように調整しました。そして、集計・報告の際には、先生方個人のご回答と特定されることのないよう配慮させていただき旨をお伝えして、記名でのご回答をお願いすることにしました。

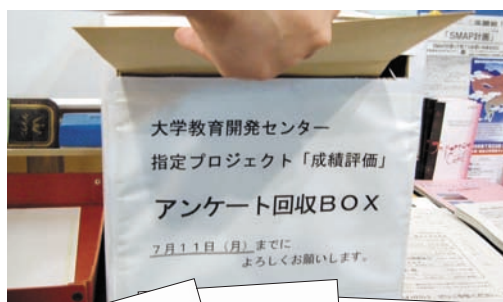
この「成績評価に関するアンケート」の内容は、まず当該科目に採られた評価の方法（定期筆記試験、レポート、小テスト、実習、実技、出席点、提出物、コメント・カード、メモ、発表レジュメ、授業中の態度、授業中の発言や質問、予習、授業への貢献度、資格の取得、卒業論文の内容など）と各々の評価の全体に占める比率（%）および採用の理由（受講生の授業の理解度、到達度、論理的思考力・問題発見と解決の能力・コミュニケーション能力・語学力・運動能力などの向上など26の選択肢と「その他」）のすべてをお答えいただく項目と、成績評価全般に関わる実態やご意見、および今後の成績評価のあり方に関するご意見などをお聞きする項目で構成しました。本学の昨年度の成績評価の実際を知るとともに今後の成績評価の改善についてのご意見を知りたいというのが本アンケートの趣旨です。

封筒の準備、アンケート用紙のコピーや封入などに大学教育開発センターのご支援をいただき、6月14日（火）に大宮・深草・瀬田学舎の先生方のメール・ボックスにアンケートの依頼をする際にも、お世話になりました。すでに今年度は出

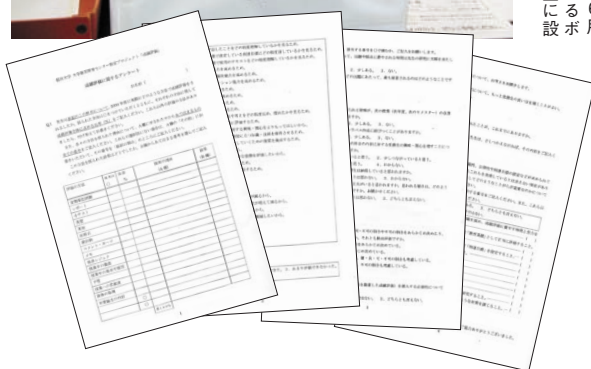
講されていない非常勤の先生方が予想以上に多かったこと、1科目以上お願いする先生方が混じっていたことなど私どもの準備不足で、多くの労をお取りいただきましたことに改めてお礼を申し上げます。

6月24日（金）を締め切りとさせていただき、さらに7月11日（月）まで延長させていただきましたが、多くの先生方にご協力いただき、感謝しています。これから集計・分析を行い、本プロジェクトの成果を実りあるものにしたいと考えています。

今後ともご支援・ご協力のほどをよろしくお願いいたします。



「成績評価に関するアンケート」（6月14日～7月11日実施）を回収するボックスは各キャンパスの講師控室に設置されました。





# Faculty Development 活動紹介

教育改善のために様々な取り組みが行われています。

## 社会学部

### 私的FD試論

社会学部長 亀山 佳明

今回「社会学部のFDへの取り組みについて」という原稿依頼を受けたが、社会学部長に就任してわずか数ヶ月の身で学部のFD論を紹介しても通り一遍の空疎な説明にしかならないと思われるので、自分自身の携わってきたゼミ方式を紹介することで責を果たすことにかえたい。

社会学部は早くから少人数のゼミ教育に取り組んできた。それは発足の当初からであったが、幾度かの制度の修正を経た後に、現在の方式がとられるようになった。社会学部は4学科（社会学科・臨床福祉学科・地域福祉学科・コミュニティマネジメント学科）から成り立っている。いずれの学科も「実習」を重視する学科であることで共通している。つまり、学生を現場に連れ出し、そこにおいて現場体験をさせることを通して教育を行うということである。社会学科では社会調査を、福祉の2学科では施設実習を、CM学科ではインターンシップによる職業体験をさせることを重要な教育手段にしている。

次に私の所属する社会学科での経験を述べることにしよう。社会学科は発足の当初から地域社会についての実証的な研究・教育を主要な目標にしてきた。学生が実際に現場に足を踏み入れ、その地で人々に接し、当の社会がどのようなものであるか体験を踏まえながら知ることが目指された。また、このような教育を行うには少人数制によるゼミ教育の方式がふさわしいと考えられた。1回生から4回生に至るまで学年ごとにゼミが配置され、それらが一貫した方式の下に運営されるように企画されている。

4年間のゼミ教育のなかで私が重要視しているのは1回生の基礎ゼミである。そのことについて少し詳しく述べよう。基礎ゼミは1回生の全員に義務づけられており、担当者は原則として専任教員とされている。ここでは次のようなことが目指される。①学生を大学の生活に慣れさせること、②そのためにはまず親しい友人を作ること、③自分が依拠できる集団をあたえること、④そこにおいて見知らぬ他者とのコミュニケーション

のとり方を身につけること、⑤大学の勉強で必要とされる基礎知識と技能を学習すること、⑥専門的な学習のための橋渡しをすること、⑦フィールド実習（社会調査）の真似事を体験することで、社会学・社会調査の面白さを実感してもらうこと、などである。

私の経験からいうと、何かある共通の目的の下に、皆で一緒になって作業することがもっとも重要である。今の学生は、見知らぬもの同士のコミュニケーションのとり方がもっとも苦手である。それを克服するには互いに「身体を取り合う」ことから始めることが有効である。共同作業とはまさにこのことを可能にする。さらにそこでは教員は可能な限り前面には立たず、何事も彼ら自身によって決定する方式をとる。たとえば調査地を選定するにあたっては、彼ら一人ひとりにプレゼンテーションを行わせ、その中から彼らの間での討議を介して選択し、決定させるのである。

この方式と併用されるのが班分けの方式である。20人を四つの班に分けるのだが、その際にも出来るだけ彼らにメンバーを決定させる。たとえば男女別の阿弥陀くじを作らせて、自分がどの班になったかを納得してもらう（くじの神様は公平だから！）。各班の男女比を同等にすることもこれもまた重要である。そして可能な限り、何事も班ごとに学生たち自身によって運営させる。いったい自分たちの班は何を調査するのか、それは4班の中でどのような位置にあるのか、班のテーマのなかで自分の役割は何か、調査地での行動は誰と何を調べるのか、チーフは誰なのか、などである。こうした方式を報告書の作成にいたるまで徹底させる。各人がまとめた報告レポートを皆の前で発表させ、批評させる。このような過程を通してプレゼンテーションのやり方を経験してもらうだけでなく、何が足りないのか、さらにどこを修正すべきなのか、というような批評精神の大切さを実感してもらうのである。

こうして先に挙げた目的を達成していくのであるが、長年の経験からいうと、学生たちの内面にいかにして「集団への帰属意識」を育成するかが何よりも肝要となる。というのも、それこそが社会学部への、ひいては龍谷大学への帰属意識の形成へと結びついていくのであり、学生の側の「満足感の核」となるものであると考えられるからだ。



## 経済学部

### 経済学部のFDへの取組みについて

経済学部教授 西本 秀樹

#### 【経済学部・新2学科体制の確立】

来年度から経済学部は、これまでの「経済学科」1学科体制から、「現代経済学科」と「国際経済学科」の新たな2学科編成<sup>\*</sup>となります。

学部教授会メンバーがめざした設計コンセプトは次の通りです。

- 他大学に先がけ「社会が求めている経済学部」を構想する。
- 学生にとって、学修目標と出口（進路）が見やすい設計とする。
- これまでの教育実績、取組みを最大限に活かす。
- 教育現場に“良い競合関係”を作り、活性化させる。
- 科目、配当を大幅に見直し、新たな学部財源を確保する。
- 教員負担の均一化を図り、担当配置の自由度を上げる。
- 学外からの意見や評価を聴き、外部専門家などの人的資源を活用する。

数十回に及ぶ専門委員会や外部要人から編成された学部アドバイザーボードとの意見交換や報告会を経て、結実させたのが“就職や進路をみすえた経済学”を目標に、新たな2つの教育目標、“計画立案ができる人材の育成”と“国際舞台で活躍できる人材の育成”に集約した新2学科体制です。

#### 【学部の新たな特徴】

さらに、次のような特徴を掲げています。

- ①活きた素材で学ぶ：地域と学ぶ「京都学」や「観光ツーリズム」。産業界や実業界等から編成された14名の「アドバイザー・ボード」の協力で設計されたキャリア・カリキュラム群。
- ②キャリア・ポイントやグレード・ポイントの導入：資格・検定試験、コンテスト結果などのスキルアップをポイント化したキャリア・ポイント。個別科目の上位成績取得者に付されるグレード・ポイント。ポイント累計によって様々な優遇措置があり、自分たちの成長を仲間と競います。
- ③ユビキタス教育環境の充実：インターネットやパソコンを使った親しみやすくわかりやすい教材開発や遠隔講義コンテンツを重点的に使っていきます。
- ④留学促進：短期語学研修、長期交換留学、自己応募留学、龍谷大学パークレー校（2006年9月開設予定）で学ぶ龍谷大学パークレー・エコノミクスプログラム。
- ⑤実社会で学ぶ長期成長型インターンシップ制度：実務体験を通じた長期成長型リレー講義。
- ⑥学習アドバイザー制度：より身近な先輩から、履修や学習計画の立て方、将来に対する目標設定の仕方をアドバイス。
- ⑦卒業後も龍大経済学部：母校での単位履修優遇制度やケーススタディを現役生と一緒に検討する場を設けます。

入試もユニークな学部一括募集で、2年間教養や素養、経済学の基礎を徹底して学んだ後、3年次に自分の進路や将来像を見据えて学科選択をおこないます。

#### 【学部アドバイザーボード】

誰でも第3者からの批判や意見に耳を傾けることは辛いものです。大学の組織や教員も他からの客観的な評価をきちんと受け止め、自らの改善に結びつけてい

くことは勇気の要ることですが、経済学部はあえてそれに挑戦しました。

経済学部が招聘したアドバイザーボードは、お名前を省略し紹介させて頂くと、次の組織・所属のメンバー構成です：松下電器産業（株）パナソニックAVCネットワークス社人事チームリーダー、（財）関西生産性本部経営革新部、京都府庁知事直轄組織知事室長、みんなの就職（株）取締役、日本リーバ株式会社社長、日本国際ボランティアセンター代表、笹川平和財団参与、（株）竹中工務店人事部長、啓光学園高等学校入試広報部長、経済学部同窓会会長、大阪ガス（株）人事部人材開発チーム大阪ガスMOTスクール長、京都大学経済学部教授、（社）関西経済連合会国際交流本部副参与。

たんに話を聞き、意見交換をするだけでは十分な収穫はないと判断し、さまざまな工夫をしました。日程ごとに宿題を出し、それをプレゼンテーションしてもらいながら、納得いくまで大学の外からと内からの見方の違いを浮き彫りにさせていきました。

また、全メンバーを次のような学部評価サブボードと新カリキュラム・サブボードの2つのサブボードに分けて編成し、目的意識をもって作業をしていただきました。

#### ◎学部評価サブボード

学部評価サブボードは、現行学部の教育内容、研究体制、教育技法、設備環境など、これまでの経済学部の研究教育内容、そして社会活動や国際的な貢献、高等学校との連携、同窓会活動などを、客観的な立場で評価し、発展的な提言をおこなうことを目的とし、その結果は将来の学部運営につなげる。

具体的検討事項：学部評価（研究、教育体系、社会貢献と国際活動、高校、大学連携と初修教育、就職支援、40年間の学部活動）・新たな学部への期待と展望

#### ◎新カリキュラム・サブボード

新カリキュラム編成サブボードは、社会が望む人材像のイメージを明確化し、今後、経済学部がめざす新たな教育内容を学部スタッフと共に計画立案ことを目的とする。

具体的検討事項：社会が望む人材像の具体的なイメージ（これまでの新入社員に欠けているもの、これまでの大学に欠けているもの、経済学教育に欠けているもの、大学教育に期待するもの、これからの経済学教育とは）・具体的カリキュラムの検討

学生の進路や将来に照準に合わせて、これまでの経験や資源を活かしながら、外部の意見を十分に反映させた新体制の経済学部。これからの大学教育の考え方や手法を先取りした模範的な学部教育につながるよう、学部スタッフが一丸となって取り組んでいきます。

（※7月末、文科省届け出済み）



## 平成17年度「教育の情報化フォーラム」

◎日 時：2005年6月10日(金)～11日(土) ◎主 催：社団法人 私立大学情報教育協会  
◎場 所：関西大学 千里山校舎

経営学部教授 北川 逸子

去る6月10日(金)及び11日(土)に関西大学で行われた、平成17年度「教育の情報化フォーラム」に参加しました。FD関係のフォーラムに参加したのは初めてでしたが、自分が知らなかったことに目を見開かれるような、充実した内容でした。参加をお許しくださった大学教育開発センターに、まず、お礼を申し上げたいと存じます。

第1日目は自分の授業が午前中にあったので、残念ながらプログラムの最初からは参加できませんでしたが、15時30分からのテーマ別自由討議の時間には、5つあった分科会のうち、「教育力向上のための教育支援組織体制」という分科会に参加できました。課題提起をなさったのは東海大学教育支援センター教育支援課課長の中津川平伍氏で、東海大学における大学改革を担う教育支援センターの業務の概要を説明されました。特に興味を持ったのは授業評価アンケートの利用法です。学生の意見を授業改善に反映する最も直接的な方法でもあります。大学側の利用法によっては教員には心理的プレッシャーを与えるものともなる授業評価アンケートです。東海大学では、教員の評価や査定に直接結びつけるのではなく、「総合業績評価システム」という形でのソフトな運用によって教員のFDに対する意識向上にうまく利用しておられるように感じました。また、公開授業やFD研究会の実施状況なども伺うことができました。

第2日目は「e-Learningの実践 (2) …e-Learning教材の開

発と利用のあり方」という分科会に参加しました。これは金沢大学総合メディア基礎センター教授鈴木恒雄氏が課題提起をされ、金沢大学における独自のe-Learning教材作成を軌道に乗せるまでの過程およびシステムを説明なさった後、実際の講義でどのように使っているか、パワーポイントで見せてくださいました。学ぶべきと思った点は、教材作成の方法が教員一人一人の要望に沿った、いわば、オーダーメイドの教材を作れるフレキシビリティをもったものであったことです。学生が違えば教材を学生に合わせて手直しするのは、当然のことです。しかし、従来のメディアならそんなに難しいことではなくても、e-Learningとなるとなかなか困難なのではないかと思っていました。しかし、金沢大学では、テキスト、動画、表、グラフなどを小さい単位でデータベース化した後、教員の注文に合わせてStream Authorというオーサリングソフトで統合し、対面授業用のe-Learning教材をまず作成したのち、教科書、自習書などの印刷教材の制作にも展開されているそうです。かなり効率の良い方法ではないかと思いました。さらに WebClassに組み込んで授業および自宅学習にも利用可能なe-Learningシステムを構築しておられるとのことでした。

この分科会に参加し、e-Learningシステム構築の優れたモデルについてうかがうことができて、自分の世界が広がったように思います。

## 平成17年度 全国大学IT活用教育方法研究発表会

◎日 時：2005年7月2日(土) ◎主 催：社団法人 私立大学情報教育協会  
◎場 所：アルカディア市ヶ谷

経済学部教授 西本 秀樹

この発表会は全国の国公私立大学教職員を対象に、教育改善のためのIT活用の振興普及を促進・奨励し、その成果の公表を通じて大学教育の質的向上を図ることを目的にしたものです。

私の参加したのは主に、5グループの内の1つ、Dグループ：社会科学系教育・芸術系教育で、全部で20件の発表とそれに対する熱心な質疑応答がありました。なかでも印象に残った発表は次の2件です。

保健情報学 (Health Informatics) の講義を米・テキサス大学から受信する「インターネットワーキングを活用した海外の大学からの遠隔授業の試み」(東京女子医科大学)。そして、日本文学に関わる国際間授業 (対ベネチア大学) をネット講義とネットアーカイブで試みる「インターネット利用の国際間の共同授業」(専修大学)。

いずれも大がかりな機材や環境を使うのではなく、一般的に国内間で用いるビデオ会議システムやネット会議ソフトを転用したもので、フリーソフトや簡単なホームページ作成ツールをフル活用しています。限られた予算の中で、担当者は試行錯誤を繰り返しながら正規授業の中に臨場感のある空間を作り出していきます。

新しい取組みに対する心配や批判に終始するよりも、“身近なことから、まずやってみる”という建設的な姿勢が、効果的な授業改善につながるものと感じました。

学内で今年度から新たな組織となった情報メディアセンターでは、全学の情報インフラや様々な電子メソッドを整備し、多様な講義に対するIT支援を充実させていきますので、ご期待下さい。(情報メディアセンター長の談として)

経営学部教授 野間 圭介

全国IT活用教育方法研究発表会に参加して得た結論を先に述べますと、大学教育におけるE-Learningの活用は試行期間を過ぎ、すでに実用上の優越性を追求する競争時期を迎えているという実感を得たことです。

一例を挙げると、これまでのE-Learningの主な機能はビデオ映像と音声、文字による講義の提示(授業機能)と、質問と解答(復習・試験機能)、そして掲示板(コミュニケーション機能)の3点でした。それに対して、今回の研究発表会で紹介された武庫川女子大学のシステムでは、上記の3機能に加えて、E-Learningによる講義の画面に、講義中にメモが書き込めるノート機能が付け加えられ、さらにそれを保存す

ることができる工夫がされています。それによって、教室で受講する講義と同じようにノートを取りながら受講し、講義が終了すると、参考資料と自書のノートが完成しているといったものです。

龍谷大学でも早稲田大学のオンデマンド講義実験に参加したり、すでに部分的にE-Learningシステムを導入したりしていますが、それを一歩も二歩も先をいく大学が少なくないことに少なからず衝撃を受けました。

今年度の全国IT活用教育方法研究発表会の報告件数は100件にのぼり、改めて整理したものを報告させていただきます。

# 大学教育開発センターの使い方

大学教育開発センター長 近藤 久雄

2004年春に大学教育開発センター長に就任して以来、これまで主として『大学教育開発センター通信』のなかで、大学教育開発センターが必要になってきた社会的背景やその果たすべき役割について述べてきました。とりわけ2005年春に出ました第9号のなかでは、「大学教育開発センターの役割と今後の課題」という題でかなり具体的に述べたつもりです。つまり大学教育開発センターの役割をひとことでまとめると、龍谷大学の教育のモニタリングと新しい大学教育創造のための研究であるということができるといえるでしょう。

モニタリングの機能としては、例えば、果たして龍谷大学の教育や授業が建学の精神や教育理念に則った形で行われているかを検証するために、様々なデータや情報を収集することがあげられます。とりわけ、龍谷大学は国から認証を受けた評価機関である大学基準協会の評価を受けることを決定して、現在報告書の作成が進んでいます。だとすると、評価基準として問われているのは何であるのかを研究し、龍谷大学の教育は果たしてその評価基準に耐えうるようにできているかどうかを分析・検討しておくことが必要になってきます。その場合に各学部などからは独立した第三者の視点から評価に必要なデータや情報を収集し分析・検討して、必要に応じて提示できるようにしておくことは大学教育開発センターの重要なモニタリング機能であると思われます。もちろんモニタリングによって得られたデータや情報は、評価資料として使われるだけでなく、新しい教育創造のための基礎データとしても役立てられるべきであることは言うまでもありません。

モニタリングの機能に対して、大学教育創造のための研究については、今後ますますその重要性が増してくるものと思われます。はなしを分かりやすくするために、具体的な例をあげてお話してみしましょう。

すでに龍谷大学でも2006年問題に対応するために導入教育の議論が始まったようです。しかしながら、残念なことに各学部の教務主任を中心に教学部の所管で議論が始まってしまいました。残念なことに、と申し上げましたのは、「導入教育」は「導入授業」でもなければ「導入カリキュラム」でも無いからです。

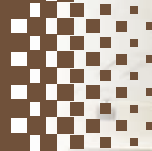
前号にも少し書きましたが、2006年問題とは、現在既に大学教育の現場で進行している従来とは次元や質の違う問題が顕在化するということなのであって、単なる学力低下の問題ではありません。言い換えると、学生になれないままに入学してくる若者達に、人間としての成長をも視野に入れた新しい大学教育をいかにして提供するかという問題なのです。これは決して、カリキュラム上に新たな授業科目を設置したり、教える内容を変えてみたり、あるいは教授法を改善したり

等のレベルで対応できる問題ではないと思われます。つまり導入教育で問われるのは、大学の「総合的教育力」であると思われます。では「総合的教育力」とは何かと申しますと、各学部やその他の教学主体などを中心に展開されています授業と、学術情報センター、学生部、キャリア開発センター、国際センター、REC、情報メディアセンター、そして建学の精神を考えるのであれば宗教部などが、連携を取って初めて醸し出される龍谷大学のキャンパス・カルチャーとそのカルチャーが持つ教育力のことであります。それぞれの部署が旧来の枠組みの中で個別に努力しても新しい教育の創造はできません。それぞれの部署は日々の実践の改善はできても、学内における他の部署と有機的な連携を図り、次元の異なる新しい大学教育の創造や改革の議論をすることは組織上できない仕組みになっているからです。加えて、現在進行している新たな事態には、従来の経験のみに頼ってでは対応できない要素が数多く含まれています。大学教育研究や高等教育研究等の学術的成果を踏まえたFD活動などによって、学内のさまざまな部署が実践している教育活動を組織的に研究し、場合によってはそれをコーディネートしなくてはなりません。つまり、「有機的な連携を図る」とは、過去の経験のみに頼らずに、「大学教育研究や高等教育研究等の学術的成果を踏まえたFD活動」を通じて、大学教育の枠の組換えを行うことです。

分かりやすい例として、導入教育を取り上げましたが、その他にも日進月歩のIT機器を教育にどう活用するか、学術情報センターを授業とどのように連携させるか、学生部の業務を学生の人間の成長や自己学習支援との関連で見直すにはどうするか、カリキュラム改革を実施する場合に考慮すべき視点は何か、教育連携ないしは高大連携の問題はどうするのか、入試と入学前後の教育で考えるべきことは何か等々、新しい教育の創造に関連して現在の龍谷大学が研究しておかねばならない問題は山積しています。

大学教育開発センターでは、こうした研究を行うために、必要なデータや情報の収集や大学が必要と認める学内外の専門家による研究チームの編成等が、学長指名で身軽にできるのが特徴となっています。こうしたことは、いわゆるFDセンターと一般に称されている同様のセンターの特徴となっています。大学がその自治性を大切に、自ら主体的に教育の創造を行おうとする場合に今後ますます大学教育開発センターの果たす役割は大きくなるものと思われます。大学教育開発センターのこうした特性を生かすも殺すも、まさに大学執行部の見識と力量が問われることでしょう。





# 公開授業と講評会

## “このクラスにテキストはありますか?”

- 日 時：2005年6月30日（木）  
4講時 15:00～16:30（講評会16:45～18:00）
- 場 所：深草学舎2号館201教室（講評会2号館202教室）
- 担 当 者：秋葉 昌樹 文学部助教授
- 科 目 名：現代社会と教育A（共同開講科目）
- 受 講 者：200人前後

大学の授業が以前のようにうまくいなくなってきたようだ、旧来の講義形式の授業展開には限界が来ているのではない、などといった話題が教員間で交わされるようになってきました。いわば旧来型の「大学の講義」の制度疲労です。

大学教育開発センターでは、こうした問題意識から「公開授業」と「講評会」を行っています。その目的は、先に述べたような状況の中でさまざまな工夫をされている先生方の授業を全学に紹介すること。そして同じ悩みを抱えて日々苦勞しておられる先生方に授業を実際にみていただき、その後の「講評会」では、新しい授業のありかたを考えるヒントになるような懇談をしていただくことです。今回秋葉先生にお願いした公開授業は、いわば大学の講義を問い直す問題提起であったように思われます。

### 公開授業を終えて

文学部助教授 秋葉 昌樹

公開授業は、3回シリーズで進めていた「ジェンダーと自己」の2回目でした。メインの素材は、女子プロテニスの礎を築いたビリー・ジーン・キングのドキュメンタリービデオ。男子プロとの待遇格差を改善すべく闘った女性の半生です。ビデオを見せてから、小グループをつくり話し合いをさせました。話し合いのテーマは「あなたがビリー・ジーンにインタビューをするとしたら何をききますか？ あなたがビリー・ジーンだったらどのように答えますか？」。その後は、即興の“記者会見”。“シアターゲーム風インタビュー”と呼んでいます。

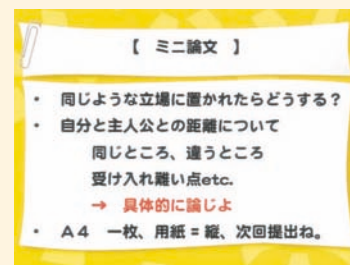
学生には、たんなる知識の習得ではなく、自分自身の身体をかい潜って発せられる生きた知識を身につけて欲しい。教育は「促し・励まし・見守り・支える」営みだ——教育学者・室俊司氏のことばです。私が教養としての教育学の授業をすすめる上で指針となっています。教育学の知識（＝テキスト）は、他者とのかわり方をさまざまな視点から見つめるリフレクシヴな営み（＝コンテキスト）の中で創りあげられます。だからこのクラスでは、教科書は指定せず、テーマごとに私と受講生がテキストを共同構築しようとして



公開授業を参観する先生方

きました。翌週学生が提出した「ミニ論文」（リフレクシブペーパー）を読むかぎり、大方の学生は自分なりの教養を力強く探ろうとしていたことがわかります。教育学の教養は、知っているか否かではなく、他者との関係をていねいに結び結ぶ中で「促し・励まし・見守り・支え」あうところに宿るのだと思います。

今回、授業をビデオにおさめていただいたことで、私の発話・動きと学生の反応との関連などを振り返ることができました。授業アンケートよりもためになる（?）。ありがとうございました。



授業の最後にパワーポイントで提示された課題内容

### 公開授業を参観して

経営学部教授 高田 信良

- 「公開授業？ 私の授業はいつでも公開ですよ。自身もモグリ経験があるので知らない人が座っていても気にしません」と話したら、「それは授業内容の公開で、今回企画のものは授業方法に関する[検討のための]公開授業です」との説明(?)を受けました。それは、ともかくも、「このクラスにテキストはありますか？」との案内文からく学ぶべき内容を受講生とともに考え構築していこうとの趣旨だろうと予想しながら、「でも、実際、どのように進めていかれるのだろうか」、興味津々で見学に臨みました。
- ビリー・ジーン・キング（1966年ウィンブルドン大会で優勝、その後、女子テニス界を大きく変える運動を先導）が格闘する種々の問題点を浮き彫りにするビデオを見た後、受講生に、ビリー・ジーン等の

登場人物役とインタビューアー役を分担してもらいながら、「自分探し、アイデンティティ確立、コミュニケーション力の陶冶（など）」を実践的に体得させようとする授業だということがわかりました。

- 教育は「うながし、はげまし、みまもり、ささえあう」ものだということを秋葉先生から学んだしだいです。
- 主題についての説明をしつつ、担当者自らの思索を提示することで＜受講者にも一緒に考えさせる＞のが授業だと思っていた私には、十分すぎるほどのカルチャーショックでした。「若さ故の意欲」（秋葉先生は若い、高田は熟年？）だけではないことを痛感させられ、おそまきながら、授業のパラダイム転換を試みようとの思いで講評会を終えました。

## 公開授業を参観して

短期大学部助教授 中根 真

秋葉先生は自己応募プロジェクト「演劇的手法をもちいた演習授業の構築：指導法及び教材の開発」の共同研究者であり、現在週3コマの演習を相互に参観していますが、その講義は初めてでした。何が飛び出すかわからない全くスリリングな90分間。前回授業を知る受講生とは異なり、参観者には「今日の授業のねら



公開授業の直後に行った講評会。

いは？」「いま行われていることにはどんな意味があるのか？」等、疑問や戸惑い、苛立ちが絶えなかったかもしれませんが。私も一瞬そんな感覚に陥ったのですが、「アクチュアリティー」「即興」という共同研究上のキーワードを思い出しました。「いまこの教室で何が起っているのか？」を学生に絶えず問いかけ、記録の作成を求めていく独特のスタイル、それに呼応するダイナミックな授業展開—音読、映像資料、グループ討議、「シアターゲーム風インタビュー」という即興劇。近藤センター長と私が動員されるハプニングには正直絶句しましたが、お陰様で、10代の少女ビリージーンの微妙な心情—テニスへの熱中と同性への思慕という全く未知の世界を演じる貴重な機会が得られたことも良き思い出（？）となりました。

## 後期にも公開授業と講評会を開催!!

是非、授業を参観いただき、講評会にもご参加ください。授業準備の秘話や苦労話など、具体的な情報交換の場となっています。授業を公開してくださる先生は右記の通りです。詳しい日程等は『大学教育開発センターNews』等でご案内させていただきます。

深草学舎 中川 孝博  
(法学部助教授)

瀬田学舎 サルズ ジョーナ イサック  
(国際文化学部教授)

## 前期「学生による授業評価調査（授業アンケート）」ご協力ありがとうございました。

ご協力いただいた先生方には各授業別集計結果を9月中旬に配付させていただきます。また、全学集計については、9月下旬にホームページ等で学内に公表いたします。よりよい授業を学生に提供するためお役にいただけると幸いです。

なお、「学生による授業評価調査実施に関するアンケート」を先生方全員に実施いたします。忌憚のないご意見をお寄せ願います。

前期の調査期間中、学生に調査実施についての感想を聞いてみました。「学生の声」として紹介させていただきます。また、「学生の声」「教育職員の声」「事務職員の声」を一手に受けた近藤センター長の「つぶやき」も紹介させていただきます。

### 学生の声

学生が受けた授業と教授が考えている授業には、学生と教授それぞれで違いがあると思います。授業アンケートを通して少しでもその違いが無くなれば、アンケートを実施した意義があるのではないのでしょうか。

経済学部 3回生

質問自体は、授業をより良くするための内容となっており、建設的な意見を求めるものになっているが、その集計結果がどのように反映されているのか全く分からない。アンケートを受けての改善策を明確にして欲しい。

社会学部 4回生

授業アンケートは授業中に行うので、正直アンケートに答えにくい。答えてどうなるのかも分からないし、不透明だと思います。多くの学生が、アンケートに答えているので、是非結果を公表して欲しいです。

法学部 法律学科 4回生

何の目的で行っているのかが分かりにくかった。このようなアンケートの意見がどのように反映されているのか、また、教授に伝わっているのを知りたい。このようなアンケートは必要だと思う。

理工学部  
電子情報学科 3回生

このような形で授業アンケートを行う事は良いと思います。結果はネットで公表するそうですが、その際、アンケート結果や自由記述欄に書かれた意見要望に対する大学側の見解・回答も知りたいです。

国際文化学部 3回生



学生による授業評価調査について数名の学生に感想を聴いてみました。読んでみると、授業ごとに繰り返し同じ内容の調査に答えさせられる学生にしてみれば、もっともであろうと思われる感想です。しかしながら一方で、同じように授業をしているのに、教室の条件や時間割上の時間帯等々、授業とはあまり関係の無い要素によって学生の答えが違っている。匿名であるので発言に無責任なものが含まれている。などといった教員側の感想も聞こえてきます。

ひとつの解決策としては、成績が出た後で記名式にして、責任ある学生の声を聴くべきであるのかもしれませんが。なぜなら、評価は評価する側と評価される側に信頼関係がないとうまく機能しないからです。たとえば、論文の評価を受ける場合、被評価者が評価者の力量を認め評価者を信頼している場合にのみ、被評価者は評価結果を謙虚に受け入れて、さらなる飛躍を目指そうと努力するでしょう。つまり記名式の調査にすることによって、教員は学生の発言を信頼することができるようになるからです。

記名式にすることは、教育的に見ても大事かもしれません。自分の名前を明らかにして責任ある発言をすべきであるということを教えることも、大学教育の大事な側面であるように思われます。

最後に、大学あるいはそれぞれの学部が、教育の目的や到達目標を明示して、個々の授業がそうした目的の実現や到達目標の達成に向けて行われているか否かを自己検証するデータを得ることも、授業評価調査の重要な目的のひとつであるという点も忘れてはならないと思います。



## FDサロン

### 教育・研究機関としての大学を原則から問い直す —FDサロン：小さくも豊かな議論の空間を目指して—

大学教育開発センター運営委員

谷 直樹 (経済学部助教授)



19世紀のサロンは、甘い音楽やカラヤン指揮によるベートーヴェンのシンフォニーを聴くことができるスーパーマーケットと通じるものはひとつとしてない。そのサロンや邸宅では、18世紀および19世紀の最良の音楽が生まれ演奏されたのだ。当時、貴族と芸術のエリートたちの間には、緊密な絆があったのだ。そのおかげで、人間精神の最高の成果を世に問うという両者の努力を結び合わせることもあった。今日では、ああ悲しいかな、この絆は、貴族 (aristocrat) 芸術家 (artist) という言葉の言語学的類似性にもかかわらず、もはや緊密なものとは言えない。

ヴァレリー・アフアナシエフ

今日、日本の大学は、大学教育が大衆化してしまった現実の中で、いかなる教育・研究組織として自らを再構築するのか、呻吟しています。この模索過程では、世界で最も「効率的」大学モデルを構築した米国の大学を範



にとった改革案が支持を得るケースがどうしても多くなるようです。「アメリカの大学はこうしている。」というわけです。筆者自身、在外研究でスタンフォード大学に長期間滞在し、米国の大学の効率性や魅力を理解してい

るつもりですし、米国モデルに学ぶべき点が多々あることを否定は出来ないと考えています。

しかしながら、滞米中に9.11とその後の米国社会の急旋回を目の当たりにした筆者は、米国型大学モデルは、特に人文社会科学における知的創造の拠点として、また、善き「市民」を育成する場として、果たして妥当なものであるのか、冷静に分析される必要があると感じています。総合大学としての龍谷大学も、今が生き残りを問われる厳しい局面であればこそ、身に降りかかる火の粉を振り払うことにのみ汲々として無反省に流行のモデルに飛びつくことなく、教育・研究機関としての大学の原則に立ち返り、確固たる信念をもって新たな大学教育を創造していくことが求められているのではないのでしょうか。

本年度のFDサロンでは、「21世紀の大学とは何か？」を年間統一テーマとし、既に前期中に以下の話題提供を頂き、職員・学生をも含めた多くの出席者とともに活発で実りある議論を深めて参りました。



「アメリカのリベラル教育をめぐる3つの問題」

ライト トーマス 経営学部教授

「ドイツにおける大学教育の変容過程」

ウェルホイザー ナディア 経済学部講師

「Universities in England and Wales」

ロザーティ サイモン 経済学部助教授

講演テーマ設定の戦略は、大略以下の通りです。

- ①まず、米国やそれ以外の大学システムについて学ぶことで、後発資本主義国的諸特徴を残しつつも戦後改革以降米国システムの強い影響下にある我が国の大学のあり方をいったん相対化する。(我々自身に潜む固定観念を破壊する。前期で大体終了。)
- ②次に、原則論に深く潜行する。(大学モデル再構築の為の原理を探る。後期の課題。)
- ③最後に、再浮上して、我々が直面する現実的諸課題を正確に診断し適切な処方箋を書く。(大学モデルを再構築する。後期さらには来年度の課題になると思われます。)

運営委員は、FDサロンが、龍谷大学の英知による教育創造の営みを結びつける触媒となることを目指しています。サロンという枠組みは必ずしも上記のような壮大な研究課題に最終決着をつける場として十分なものとは言えませんが、教員・職員がともに楽しみながら大いに学び、考える場として、創造的議論を可能にする小さくも豊かな空間として、サロンを演出してゆく所存です。そのため、毎回話題提供者の嗜好並びにテーマに合わせた飲み物・お菓子・音楽を用意しております。ウェルホイザー先生は手作りのドイツ・パンを振る舞ってくださいました。

今後とも教職員の皆様のご協力をお願い申し上げます。学生を連れてきて頂いても構いません。

#### ■後期にもFDサロンを開催!!

現時点で決定している話題提供してくださる先生は以下の通りです。

詳しい日程や内容等は『大学教育開発センターNews』等でご案内させていただきます。

細田信輔 (経済学部教授)

小峯 敦 (経済学部助教授)

谷 直樹 (経済学部助教授)

※瀬田学舎や大宮学舎での開催も検討していきます。



第3回FDサロンで出されたワッフルとフルーツ。毎回のお茶とデザートは和やかな雰囲気をつくり出すための必須アイテムです。

## 《教員対象》パソコン講習会開催

大学教育開発センターNews (No.2005-10) にてお知らせいたしましたとおり、教員のパソコンスキルの向上を目的とした「パソコン講習会」を9月に深草学舎で開催いたします。今回はPowerPointとStream Authorの講習となります。参加費は無料です。まだお申し込みでない方はぜひご参加ください。

|         | PowerPoint基本    | PowerPoint応用 | Stream Author       |                 |
|---------|-----------------|--------------|---------------------|-----------------|
| 講 習 日 時 | 9月8日(木)2・3講時    | 9月9日(金)2・3講時 | 9月12日(月)2・3・4講時     | 9月13日(火)2・3・4講時 |
| 募 集 定 員 | 30名             | 30名          | 4名                  | 4名              |
| 講 習 場 所 | 深草学舎 5号館302実習室  |              | 深草学舎 5号館2階メディア教材作成室 |                 |
| 講習担当者   | 情報メディアセンタースタッフ等 |              |                     |                 |

※2講時/10:45~12:15 3講時/13:15~14:45 4講時/15:00~16:30

- 申込締切/2005年8月26日(金) いずれも申込先着順
  - 申込方法/お申し込みの際は「①希望するコース ②氏名 ③所属学部(非常勤はその旨) ④連絡先(電話・E-mailアドレス等) ⑤「Dreamアカウント」の有無(情報処理実習室を利用される際に必要なアカウントです。無い場合は発行いたします。)」をお知らせください。
  - 申込先/大学教育開発センター(内線1050、1051/DCHE@nmc.fks.ryukoku.ac.jp)
- ※なお、すでに定員に達している場合はお申し込みができませんのでご了承ください。

### 【講習内容】

#### 1. PowerPoint基本操作編

講習目標: プロジェクターやスクリーンに投影するための効果的なスライドを作成する。

講習内容:

- 基本操作  
スライド作成、アニメーション設定、デザインの適用  
スライドを効果的に見せるためのアニメーションの設定、URLのリンク設定  
スライドショーの実行
- 印刷  
レジメ等の印刷方法
- 教室にてプロジェクター投影の実演

#### 2. PowerPoint応用編

講習目標: プロジェクターやスクリーンに投影するための効果的なスライドを作成する。  
画像、動画を取り込み、挿入する。

講習内容:

- 基本操作  
スライド作成、画像や映像の挿入、アニメーション設定、デザインの適用  
スライドを効果的に見せるためのアニメーションの設定、URLのリンク設定  
スライドショーの実行
- Word文書からの取り込み
- 画像取り込み、リサイズ(この講習会での重要ポイント)
- デジタルビデオカメラからの映像取り込み(この講習会での重要ポイント)
- 印刷  
レジメ等の印刷方法
- 教室にてプロジェクター投影の実演

#### 3. Stream Author

Stream Authorは、動画を再生しながら、PowerPointなどのスライドが自動的に切り替わるWebコンテンツを作成するためのソフトウェアです。  
提示教材を作成できるのももちろんのこと、学生の復習用教材とすることもできます。

講習目標: プロジェクターやスクリーンに投影するための効果的なスライドを作成する。  
画像、動画を取り込み、挿入する。

講習内容:

- 基本操作  
撮影済みのビデオを使い、PowerPointスライドと同期をとる。  
撮影しながらPowerPointスライドの切り替えタイミングを調整する。

### 新着図書

大学教育開発センターでは、センターの資料として図書を購入しています。貸し出しも行っていますので、どうぞご利用ください。また、購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせください。

書籍名…東大教授の通信簿 「授業評価」で見えてきた東京大学  
著者名…石浦 章一  
出版社名…平凡社  
ISBN4-582-85263-7

書籍名…学ぶ意欲の心理学  
著者名…市川 伸一  
出版社名…PHP新書  
ISBN4-564-61835-9

書籍名…さなごの時代の教育学  
著者名…奥野 雅和  
出版社名…春風社  
ISBN4-86110-037-2

書籍名…学力危機 受験と教育をめぐる徹底対論  
著者名…市川 伸一/和田 秀樹  
出版社名…河出書房新社  
ISBN4-309-24217-0

書籍名…高等教育シリーズ130 高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ  
著者名…荒井 克弘/橋本 照彦  
出版社名…玉川大学出版部  
ISBN4-472-46319-6

書籍名…大学新入生に勧める101冊の本  
著者名…広島大学総合科学部101冊の本プロジェクト  
出版社名…岩波書店  
ISBN4-00-023763-2



### 先生の知恵袋

センターの職員として、先生方と関わる中で、この話は他の先生方にも役立つのではないだろうかと考えることがたくさんあります。センターに立ち寄られた先生の一言、FDサロン終了後の雑談の中、こういった中から拾いあげた先生方の持たれているひと工夫、みなさんにも紹介できれば・・・このような思いから、このコーナーが生まれました。

### 読書のすすめ

最近、先生方のお話や講演会、テレビ等で「日本語能力の低下」という言葉をよく耳にします。

また、「日本語能力の低下」の要因のひとつに『活字離れ』も指摘されています。学生の活字離れを防ぐにはどうしたらよいのでしょうか?

一昔前は、幼い子どもに親が「読み聞かせ」をし、小学生になると担任の先生が、国語の教科書に載っている物語を家族に向かって「朗読」するように、また、図書館や学級文庫の「本をたくさん読む」ように勧めました。さらに、中学・高校生になると「新聞を読む」癖をつけるように言われました。このように私たちは当たり前のように活字(言葉)と向き合ってきたのです。

本が身近にある環境をどう作るか? 読書時間をどう確保するか?

読売新聞にある大学教員のこんな記事が載っていました。「学生に薦めたい新聞や雑誌の記事を選び、講義の最初の10~15分間に読ませている」・・・先生方の努力が欠かせないようです。



速報!!

# 今年度、第1回龍谷大学FDフォーラム開催します!

テーマ

**21世紀に対応できる大学教育の創造**  
～教養教育を中心に再考する～(仮題)

※詳細は決まり次第News等で案内します。

日時

**2005年12月3日(土)午後**

会場

**龍谷大学 深草学舎**

## 第I部 基調講演会



### 藤田 英典氏

国際基督教大学教授、  
元東京大学教育学部学部長、  
教育改革国民会議委員、  
中央教育審議会義務教育特別部会の委員、  
日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業委員会委員、  
元日本教育社会学会会長、他

## 第II部 シンポジウム

本学の教育改革と密接に関わる内容で実施予定。シンポジストは学内者と学外者で候補を検討中。

### 第1回 龍谷大学FDフォーラム実行委員会

#### ●委員長

近藤久雄(大学教育開発センター長・法学部教授)

#### ●委員

谷 直樹(経済学部助教授)

中川孝博(法学部助教授)

松居竜五(国際文化学部助教授)

秋葉昌樹(文学部助教授)

上垣 豊(法学部教授)

室住賢一(大学教育開発センター事務部長)

## 2006年度 自己応募プロジェクト募集

大学教育開発センターでは、教育改革を推進する一環として、学内の個人又はグループに対し、教育全般、授業、教材等の研究開発を奨励し、公開に対する支援を行うことを目的に自己応募プロジェクトを実施しています。

### ◆応募資格

- 本学における教育全般、授業、教材等の研究開発を行おうとする個人またはグループ。
- 研究代表者は本学専任教育職員とする。共同研究者は専任教育職員・非常勤講師を問わない。
- ※各学部、共同開講科目、学部共通コース、教職課程の教学責任主体に係るものについては、別途予算措置がされているため、本事業の対象とはしない。

### ◆応募条件

- 開発成果が複数の学部に応用性のあること。
- 次の申請額及び内容の範囲内のものであること。

#### 申請額

- ① プロジェクトA (上限30万円) 【採択件数目安:3件】
- ② プロジェクトB (上限20万円) 【採択件数目安:4件】
- ③ プロジェクトC (上限10万円) 【採択件数目安:5件】
- ④ プロジェクトD (上限5万円) 【採択件数目安:5件】

研究成果は報告会を開催するとともに報告書(右)にまとめられ、学内に配布している。

#### 内容

- ① 授業研究
  - a.教材に関するもの…教材作成・教材開発・テキスト作成
  - b.手法に関するもの…実験的授業・学生討論会実施・授業法改善
- ② 大学教育研究
  - a.大学全般・複数学部等に関わるもの

### ◆応募締切

**2005年12月2日(金)**

### ◆申請書類

応募に必要な申請書類は、大学教育開発センターにあります。なお、申請書類は大学教育開発センターWebからダウンロードできます。 URL: [http://www.ryukoku.ac.jp/fd/pro\\_jiko\\_2006.html](http://www.ryukoku.ac.jp/fd/pro_jiko_2006.html)

※専任教育職員には応募要項を配布済みです。詳細については、専任教員または大学教育開発センター(内線1050・1051)までお問合せください。

### ◆編集後記

6月24日に2005年度第1回全学教学会議が開催され、教務会議議長がまとめられた『『2006年度入学生』に対応したカリキュラム構築』の答申にもとづいて当面の課題に全学的に取り組むことが確認されました。あわせて2006年度以降に引き継ぐ課題について全学的に取り組むことを共通認識として、全学教育改革検討委員会の設置が承認され、7月8日に第1回目の会議が開催されました。同会議の構成員は、副学長をはじめとして、教学部長、教学副部長、教務主任、大学教育開発センター長等で構成されており、オブザーバーを含め、総勢52名にのぼります。各委員等はそれぞれワーキンググループに別れて、今日的教育課題に取り組んでいただくことになります。大学が直面している困難さは、単に少子化問題にとどまらず多岐にわたっています。

今こそ本学の総合的な教育力が問われており、大学教育開発センターの役割はますます大きくなるものと痛感しています。

大学教育開発センター事務部長 田辺 等